令和４年度作品集

平和コンクール

第２２回平和絵画コンクール最優秀賞　釧路市立愛国小学校４年　須藤　萌衣　さん

釧路市平和都市推進委員会

＜ 目　　次 ＞

【第２２回平和絵画コンクール】

最優秀賞	愛国小学校４年	須　藤　萌　衣	1
優 秀 賞	湖畔小学校６年	門　間　大　明	
優 秀 賞	鳥取西小学校１年	下　山　真　空	2
優 秀 賞	愛国小学校３年	宮　﨑　由　奈	
優 秀 賞	愛国小学校５年	黒　滝　琴　音	3
佳　　作	愛国小学校６年	笠　島　悠　愛	
佳　　作	愛国小学校５年	中　町　茉　子	4
佳　　作	愛国小学校４年	細　野　陽菜子	
佳　　作	興津小学校３年	秋　葉　　遥	5
佳　　作	釧路小学校２年	三　宅　美沙希	
佳　　作	湖畔小学校２年	林　　志穂里	6
佳　　作	鶴野小学校１年	島　崎　斗　碧	

【第３５回平和図書読書感想文コンクール】

最優秀賞	北海道教育大学附属釧路義務教育学校８年	青　戸　愛　唯	今の私たちがあるのは…	7
優 秀 賞	北海道教育大学附属釧路義務教育学校９年	柴　田　淳　弘	広島に念う	9
優 秀 賞	青陵中学校１年	澁　谷　茉　奈	禎子の千羽鶴	11
優 秀 賞	音別中学校１年	清　水　望　叶	核兵器によって奪われたもの	13
佳　　作	北海道教育大学附属釧路義務教育学校９年	飯　村　眞　子	「小さな幸せを願って」	15
佳　　作	北海道教育大学附属釧路義務教育学校９年	坂　井　友　望	「私が世界に伝えたいこと」	17
佳　　作	鳥取中学校２年	伊　藤　来　流	沖縄戦と原爆から考える平和について	19
佳　　作	北海道教育大学附属釧路義務教育学校９年	松　枝　愛　佳	戦争から学んだこと	21
佳　　作	北海道教育大学附属釧路義務教育学校９年	山　本　明日香	平和のバトン	23
佳　　作	阿寒湖義務教育学校８年	山　崎　碧　音	戦争を知らない自分に	25

【第２１回平和の主張コンクール】

最優秀賞	釧路北陽高校２年	高　橋　和　花	戦争のない世界へ	27
優 秀 賞	釧路北陽高校２年	定　岡　若　奈	平和について	29
優 秀 賞	釧路北陽高校２年	髙　山　佳　音	平和とは何か	31
優 秀 賞	釧路北陽高校２年	渡　邉　　奏	平和とは	32
佳　　作	釧路北陽高校２年	伊　藤　沙　彩	平和	34
佳　　作	釧路北陽高校２年	佐久間　　慧	戦争のない世界に	35
佳　　作	釧路北陽高校２年	宮　木　美　羽	私が思う平和について	36
佳　　作	釧路北陽高校２年	前　田　あすか	平和な世界へ	38
佳　　作	釧路北陽高校２年	那　佐　　晏	平和って何だろう	39
佳　　作	釧路北陽高校２年	齋　藤　翔　太	平和の意味	40
佳　　作	釧路北陽高校２年	平　野　心　結	平和について	42
佳　　作	釧路北陽高校２年	飯　澤　夢　来	私の思う平和	44

第２２回平和絵画コンクール
最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）愛国小学校４年　須藤（すどう）　萌衣（めい）

第２２回平和絵画コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）湖畔小学校６年　門間（もんま）　大明（ひろあき）

第２２回平和絵画コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）鳥取西小学校１年　下山（しもやま）　真空（まそら）

第２２回平和絵画コンクール
優秀賞（釧路青年会議所理事長賞）　愛国小学校３年　宮﨑（みやざき）　由奈（ゆうな）

第２２回平和絵画コンクール
優秀賞（釧路ユネスコ協会会長賞）　愛国小学校５年　黒滝（くろたき）　琴音（ことね）

第２２回平和絵画コンクール
佳作　愛国小学校６年　笠島（かさじま）　悠愛（ゆうあ）

第２２回平和絵画コンクール
佳作　愛国小学校５年　中町（なかまち）　茉子（まこ）

第２２回平和絵画コンクール
佳作　愛国小学校４年　細野（ほその）　陽菜子（ひなこ）

第２２回平和絵画コンクール
佳作　興津小学校３年　秋葉（あきば）　遥（はる）

第２２回平和絵画コンクール
佳作　釧路小学校２年　三宅（みやけ）　美沙希（みさき）

第２２回平和絵画コンクール
佳作　湖畔小学校２年　林（はやし）　志穂里（しほり）

第２２回平和絵画コンクール
佳作　鶴野小学校１年　島崎（しまざき）　斗碧（とあ）

第３５回平和図書読書感想文コンクール
最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

今の私たちがあるのは…

北海道教育大学附属釧路義務教育学校　８年　青戸（あおと）　愛唯（めい）

ubiquitous（ユビキタス）という言葉はラテン語で「神はどこにでも存在する」という意味を持っている。これは英語の先生が好きな単語で、私の興味を惹かれた言葉でもある。しかし、この作文を書いているときにふと思った。神がいるというのなら、なぜ戦争は起きてしまうのだろう。神様は、私たちが平和に暮らすことを望んでいないのだろうか。

昭和二〇年八月六日午前八時十五分。神様は日本に残虐な試練を与えた。アメリカで開発された原子爆弾が投下されたのだ。当時広島市にいた三十五万人のうち推定十四万人。続けて八月九日午前十一時二分。長崎市にいた二十四万人のうち七万人近くが亡くなった。

私はそのように悲惨な「第二次世界大戦」の出来事を聞くと、一番最初に『焼き場に立つ少年』という題名の写真を思い浮かべる。その写真は、占領軍として長崎に入ったジョー・オダネルさんが、軍のきまりを破ってまで撮影したというものだ。その行動には、自分の国のしたことが正義ではない、という強い思いがあったという。アメリカが日本に原子爆弾を落としたこと、かつて日本の敵国であったことは揺らがない事実だ。しかし、本当に敵国の国民全てが敵であると言い切れるだろうか。私は自信を持って違う、と言えると思う。なぜなら、彼のように自国に反発し、「二度と酷い戦争を繰り返してはならない」という考えを広めようとした人が、世界には大勢いると思うからだ。

私が読んだのは『いしぶみ　広島二中一年生　全滅の記録』だ。建物の解体作業をしていた、広島第二中学校の一年生三百二十一人、そして四人の先生が一人残らず亡くなったことが記されている。たった一瞬で子供の夢が失われた。逃げ遅れて煙に飲み込まれた人、親のもとに戻ることができず道の途中で息絶えた人…。この本を初めて読んだとき、罪のない人が無差別に殺されてしまったことに、やり場のない悲しみを覚えると同時に、原子爆弾を恐ろしいと感じた。

私は『いしぶみ』を読み、さらに戦争について知りたくなった。そこで『平和のバトン―広島の高校生たちが描いた八月六日の記憶』という本を読んだ。こちらは、戦後に生まれた広島の高校生が、実際に被爆した人の記憶を聞きながら絵を完成させる物語だ。語り部のように「声」で表現するのではなく、「声」として聞いたものを「形」として届ける。形は違えど、後世に歴史を伝えていく。その心がけを大切にしていくべき

だと思った。

私の曽祖父は戦時中、敵の襲撃から逃げようとしたことがあるそうだ。脚には爆撃の破片が刺さった痕が残っていたという。しかし、曽祖父はその体験を誰にも話したくないと言っていたと、母に聞いた。戦争を知らない私たちは、争う人の気持ちも、家族が家に戻らなかった人の気持ちも、想像でしか知ることができない。どうして戦争をするのかも、わからないままだ。

歴史に詳しい国語の先生が見せてくださった『釧路空襲』からは、約六千人が争いに巻き込まれ、さらには「釧路一面が焼け野原」だったという詳しい様子が窺えた。釧路が被害を受けた要因は、港や鉄道が栄えていたこと、工場が多かったことが関係していると言われている。市民は何もかもが灰色になった無常さに、涙も出なかったいう。壕から出る際に倒れ、人々の下敷きとなって亡くなった姉弟の話。爆風で飛ばされた赤ん坊の話が特に印象に残った。家族がいる・家がある・ご飯が食べられる…そして何より、明日がやってくることが今よりもっと、当たり前ではない世界だったことを痛感した。この三冊の本を読むまで、こんなに知らないことがあったのか、とも。

私のように、戦後に生まれた人が戦争を知らない理由は「社会の授業で習ったから、なんとなく知っている」ということにあると、私は思っている。「知った」ことで満足してしまい、それ以上深くは知ろうとしないのであろう。過去にあった出来事も、「歴史」という便利な言葉に片付けられてしまう。教科書に載っているからという理由で戦争を見てはならない。戦争に巻き込まれた人も、過去にあった残酷な戦争がこのように扱われてしまうことを望んではいないと思う。私は戦争について知ってからずっと、疑問を持っている。力で制圧しても沢山の犠牲をうむことにしか繋がらない。誰も得をしない。なのに、なぜ人は争いをするのだろう。人の命を無駄にしないで解決する方法はないのだろうか。

平和を創っていくために今の私たちにできることは、命懸けで国を守ってくれた先人たちに感謝しながら、生きていくこと。平和が当たり前であると思い込まないこと。戦争から目を背けず、記憶を語り継いでいくこと。同じ争いが起こるのを防いでいくこと。そして、限りある命を大切にすることだ。

第３５回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）

広島に念う

北海道教育大学附属釧路義務教育学校　９年　柴田（しばた）　淳弘（あつひろ）

次のページをめくるのは怖かった。次はどんなむごい写真が収められているのかと思うと、ページをめくろうとする手が勝手に震えてくる。

僕は少し、原爆をなめていた。「教科書に載っている歴史の一つ」程度にしか捉えていなかった。毎年夏に広島市で行われる平和記念式典のテレビ中継は、折角の高校野球が見られなくなってしまうからちょっと嫌だな。とも思っていた。

でも、この写真集を見て、言葉だけでは伝えきれないもの、想像することができないような真実を目の前に突きつけられた。見るに堪えない被曝した人たちの姿が次々と並び、あまりにも無惨な壊れ方をした広島市街。自分達が当たり前のように好きなものを好きなだけ食べられて、好きなときに好きなことができる場所。時間があるということが、いかに貴重ですばらしいことであるか、痛感した。

原爆は、職人さんが心を込めて、精一杯の力でつくり上げた建物と、その建物で、その時、その瞬間を生きぬくために一生懸命働いている人や、家の仕事に勤しむ人たち。そういういろんな人の想いがいっぱい、いっぱいつまった建物も、そこでその時を生きる何万人もの人たちをも巻き込んで、たった一部の人の判断で、一瞬にして押し潰してしまった。爆心地では、風速四百四十メートル、時速にしておよそ千六百キロメートルにも及ぶ爆風が吹き、地表の表面温度は、鉄が溶け始める千五百度を遥に超す、三千度から四千度にまで達した。その中で、何が起こったのかさえ分からぬまま、一瞬で亡くなってしまった人たちがいた。そして、爆心地を中心として、数え切れない程多くの人が被曝し、苦しめられた。この時の放射線量は、爆心地からの距離が二キロメートル離れた所で一シーベルトだった。一シーベルトは、原爆症の自覚症状が表れ始める量だそうだ。さらに四シーベルトに達すると、被爆した半数の人が亡くなってしまう。僕の家からの範囲を考えたとき、予想外のあまりの広さに驚いてしまった。

この、まるで地獄絵図かのような惨状を、目の当たりにした人々は何を感じただろうか。きっと、悲しさ、悔しさ、むなしさや怒り、辛さや苦しさ、知人や家族の心配など、本当にたくさんの想いに打ちひしがられていたことだろう。いや、もしかすると何も考えられなかったかもしれない。その中には、自分と同じ年代の学徒動員が大勢いたということを知った。ゾっとした。もしその中に自分がいたら、何も感じぬま

まただ目の前の惨状に立ちつくしていたに違いない。そう、強く感じた。

そして今、思う。なぜだ、なぜこんなにも罪のない大勢の人がいつまでも苦しめられなければいけないのか。現在も、原爆の放射線による原爆後遺症に苦しみ続けている人がたくさんいる。事前の実験や数値から、多大な被害が出ることは分かっていたはずだ。なのになぜ、あのとき、原子爆弾は日本に落とされなければならなかったのだろうか。

これだけ科学技術が発達してきた世の中で、今なお全世界で一万三千発以上もの核兵器が存在しているのはどうしてだろう。しかも、その中には、広島・長崎型の千五百倍と言われるものや三千倍といわれる程の威力をもつものもある。そんな爆弾を投下された下に住む人のことを考えたことはあるだろうか。もし、考えていたのなら、とてもできるようなことではないと思う。

戦後七十七年が経とうとする今、僕も含めて、原爆や戦争を意識している人は数少ないのではないか。ただの歴史の一幕だとしか、捉えられていなかったのだ。そこで、今一度、この写真集を見てほしいと願う。日本や第二次世界大戦に関わったどの国でも、戦後七十年以上経った今、戦争の風化は著しく進んでいると感じる。二度とこんな思いをする人が出ない世界であるために。これ以上、ヒトという一種の生物が、同じ人間同士で、互いを痛めつけ合わないために。

今年の平和記念式典の中継に、僕は今までとは違う思いで参加する。

第３５回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

禎子の千羽鶴

釧路市立青陵中学校　１年　澁谷（しぶや）　茉奈（まな）

みなさんは「千羽鶴」と聞いて何を思い浮かべますか？千羽鶴はその名の通り、折り鶴をたくさんつないだもので、心のこもった贈り物とされます。千羽鶴には「早く良くなりますように」という思いの他に、平和への祈りが込められていることもあります。

今回私が読んだのは千羽鶴に対する「平和」というイメージのきっかけとなった少女、禎子の話です。

二歳の時広島で被爆した禎子は、それから十年後、十二歳の時に白血病を発症し、明るい未来への門を閉ざされて、中学校にも通えないままこの世を去りました。禎子は自分の症状が悪化したときも自分の事より家族のことを心配していました。十二歳の禎子は「千羽折れば治る」という言い伝えを聞き、弱音をはかずひたすら鶴を折り続けていました。この時の禎子は今の私と同じ年です。はたして私ならこんなに周りのことを考えることや希望をもち続けることができるでしょうか。その思いやりは痛みを知っている人にしかできないものだと感じました。そして、その時代周りの人との協力はもちろんのこと、国民全員が戦争のために我慢を強いられていたのだと思います。

この本を通して私はたくさんの人々の未来を奪った戦争の恐ろしさ、それだけではなくその時代を生きぬいた人々のたくましさを改めて痛感しました。

そして禎子は「世界で最も名の知れた被爆者」として有名ですが、世界は日本のこと、原爆のこと、そして禎子のことをどう思っているのか気になった私は、「サダコ『原爆の子の像』の物語」を読んでみました。

この本を読んで一番驚いたことは、世界の人々は私達日本人よりも禎子のことをより詳しく知っているのです。確かに私はこれら二冊の本を読むまでは禎子の名前を耳にしたことがある程度でした。

今では、禎子をモデルにした小説が世界中で読まれています。多くの人々は禎子と千羽鶴の話を自分の差別や戦争などの実体験に重ね、勇気をもらっているのです。戦争やその傷跡に苦しめられているのは日本だけではない、当たり前のことですがその時強く感じました。

小説や学校の授業で禎子や原爆について知った世界中の人々から広島に千羽鶴が送

られてくるということを知って、戦争していた時は敵同士でも平和に対する思いや願いはみんな同じなのだと思いました。

千羽鶴の送り先、広島にある「原爆の子の像」は禎子の同級生達が設立に立ち上がっていたそうです。その像とは少女が金色の折り鶴をかかげているものです。禎子の上った空、あの日あの時すべてを消し去った大きな光が降ってきた空へ。

これはぼくらの叫びです
これは私たちの祈りです
世界に平和をきずくための

この文は像の台座の内部に置かれた石碑に刻まれた文章です。たった三行の短い言葉ですが戦争というものの現実、子ども達の思いが込められています。

そして、この像には姉妹像が存在するのです。姉妹像の設立の運動に立ち上がったのは原爆を生み出したまち、アメリカのニューメキシコ州に住む子ども達なのです。反対意見もあったものの全米五万人の子ども達の募金で「子どもの平和の像」は作られました。地球の形をした像の内側には、色とりどりの千羽鶴がつるされ、外側にぐるりと巻かれた帯には、こう書かれています。

This is our cry.
This is our prayer.
Peace in the world.

広島の「原爆の子の像」の碑文を英訳したものです。

私たちがこれからできること。それは今好きなご飯を食べ、好きな服を着て、好きな音楽を聴く、この日常が当たり前ではないことを知り感謝すること。戦争によって何もかも失っても希望を捨てず懸命に生きている人、千羽鶴に祈りを込めた少女の存在を忘れないこと。戦争を「悲しい話」で終わらせず何ができるか考えること。

そして、このすべてを次の世代に伝えていくこと。

第３５回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（連合北海道釧路地区連合会会長賞）

核兵器によって奪われたもの

釧路市立音別中学校　１年　清水（しみず）　望叶（もか）

皆さんは核兵器という物がどれほど恐ろしいか、どれほど悲しい物か知っていますか？

私は核兵器によって家族を亡くしたり、大切な故郷が焼け野原になったりしたことは無いけれど、『核廃絶へのメッセージ』という本を読んで核兵器という物の事が少しわかった気がします。

この本には、核兵器を無くしたいという筆者の思いや、被爆者の方々の思いが書かれていました。その中に『或る語り部の独白』というページがありました。その中に被爆地で開催される国連軍縮会議の話がありました。海外からの外交官や軍縮専門家がやってくるそうです。その際に必ず被爆者の訴えの時間という時間が設けられ、被爆者が被爆時の惨状、その後の苦しい生き方を話し、核兵器廃絶を訴えるそうです。

> 被爆者の話に感動させられた。われわれもあの人たちの訴えに真剣に応えねば、と決意を新たにした

と言う報道がテレビで流れたり、時には被爆者の話に感動して目に涙を浮かべる外交官の姿が報道されたりします。しかし、その次の討論の時間になると、

> 核兵器廃絶？そんなものは核兵器を持たない国のたわ言だ、現実の国際政治の厳しさを弁えない理想主義者の夢に過ぎない…

この発言が先ほど、被爆者の話に感動させられた外交官の口から述べられます。

皆さんは、原爆について書かれた本や、資料を目にしたことはありますか？本を見れば当時の人たちがどれだけつらい思いをしたか、どれだけ必死に生きようとしていたかなどがわかります。もし、当時の写真や映像があれば原爆が落ちた直後のことなどが鮮明にわかると思います。ですが、本をどれだけ読み込んでも、写真や映像をどれだけじっくり見てもにおいのことは伝わりません。

突然ですが、皆さんは「におい」の記憶はありますか？春に咲いていた花のにおい、夏に行ったプールのにおい、秋に吹いていたあの涼しい風のにおい、冬に食べた鍋のにおいなど、人によって違いはあると思いますが、何かしら思い出の中に強く残っているにおいはあると思います。その中でも野原が焼け焦げた時の焦げ臭さや、人の遺体から出る死臭を知っているという人はごくわずかだと思います。私はそのようなにおいは知らないし、この先知りたいと思いません。

しかし、長崎に原爆が落ちたあの日、このにおいが町を包み込んだのです。早朝だったとはいえ、八月の真夏の暑い日、ただにおいが漂っただけでなく、蒸し暑さもプラスされ、最悪な状況の中助けを待っていなければいけないとなると、とてもつらかったと思います。

私は、この本を読んで核兵器が他の爆弾よりはるかに威力が大きく、恐ろしい物なのだと改めて実感しました。この先何十年、何百年先の未来に核兵器という物によって幸せを壊される人たちが出てこないことを祈っています。

第３５回平和図書読書感想文コンクール
佳作

「小さな幸せを願って」

北海道教育大学附属釧路義務教育学校　９年　飯村（いいむら）　眞子（まこ）

学校へ行く、友達と話す、家族と過ごす、そんな当たり前の日常が一瞬にして消えさった、一九四五年八月六日のヒロシマ。私は朽木祥さんの『光のうつしえ』を読んで、当時の廣島を生きていた人々だけでなく、原爆が落とされた後のヒロシマにのこされた人々について知った。

特に印象に残ったエピソードがある。それは小さな男の子とそのお母さんの話だ。小学一年生の男の子は朝、学校に行かなければならない時間にも関わらず、飼っていたメダカが孵化している様子に夢中になっていた。お母さんが注意すると、男の子は慌てたのか、手に持っていた椀の中身をぶちまけてしまい、着ていた洗いたてのシャツやズボンに、アオミドロが混じった水がかかった。怒ったお母さんは男の子の服をふきながら叱った。男の子は情けなさそうな姿をして、そのまま黙って出て行った。それがお母さんが見た最後の男の子の姿だった。原爆が落ちたのはそれから、まもなくのことだった。お母さんが救護所に駆けつけた時には、もう男の子の命はなかった。ただ、わずかに焼け残ったシャツにアオミドロの汚れた跡だけが残っていた。

お母さんは何度後悔しただろうか。あの時
「行ってらっしゃい。」
と優しく言ってあげられなかった自分を何度呪っただろうか。いつか息子がきっと帰ってくるはずだと何度自分に言い聞かせただろうか。このお母さんと同じように戦争によって重い後悔と切ない希望を抱えて、もうどこに進めばいいのか分からなくなった人生を、彷徨っている人達は広島に、いや、世界中にいたに違いない。原爆、そして戦争は多くの人達を殺しただけでなく、残された人達の心までもを殺したのだ。また、原爆の際に、捕虜としてとらわれていたアメリカ兵が、原爆で家族を殺された人達によって、引きずり出されて殺されたという。こんなにひどい行為をされたら、怒りに震え、敵国であるアメリカの兵士に憤りをぶつけてしまう気持ちも分かる。しかし、アメリカ兵を殺しても死んだ家族は帰ってこない。ただただ、虚しい気持ちが残るだけだろう。原爆がまた、一つのひどい行為のきっかけになり、負の連鎖になってしまう。そして、どんどん悲しい思いをする人が増えていってしまう。そんな戦争は二度と起こしてはいけない。

私は戦争を体験していない。けれど昔も、はしゃいで母親に叱られる子どもや、生徒

と笑いあう先生など今と同じような日常があって、それが原爆によって壊されてしまった事実を忘れてはいけないと強く思う。

一人一人の小さな日常の幸せが平和な世界をつくっている。だから、世界中の全ての人が小さな幸せがいつまでも続くようにと願えば、あんなひどい戦争はもう起こらないだろう。私はこれからも日常の小さな幸せを噛み締め、これがいつまでも続くように願って生きていきたい。

第３５回平和図書読書感想文コンクール
佳作

「私が世界に伝えたいこと」

北海道教育大学附属釧路義務教育学校　９年　坂井（さかい）　友望（ともみ）

みなさんは想像できますか？自分の命が、大切な人の命が、一瞬にして奪われる悲しさや悔しさを。食べる物も着る服もない、過酷な世界を。今から約七六年前、一九四五年八月六日に広島市に原子爆弾が投下されました。辺り一面に広がる焼け野原や、炎に包まれて苦しむ人々。その光景は言葉にならないほど悲惨ですが、それでも懸命に生きようとする人々の姿は、現代の私たちを勇気づけ、たくさんのことを教えてくれます。私が出会った一冊は、そう気付かせてくれました。

私がこの冬に読んだのは、「この世界の片隅に」。戦争が激化する中、前向きに生きていこうとする女性・すずの日常を描いたお話です。呉に嫁いだすずですが、空襲で右手を失いました。また、広島の江波の実家に住む両親や妹も、原子爆弾の放射線に苦しみながら亡くなりました。それでもすずは諦めません。

「うちらの暮らしは続いていく。八月十五日も十六日も十七日も、九月も十月も十一月も、来年も再来年も十年後も、ずっとずっと。」

今日一日を生き抜くのにすら精一杯だったけれど、明日への希望を忘れなかったのです。

今を生きる私はどうでしょうか。帰る家があり、家には私を待っている家族がいる。欲しい物は簡単に手に入り、食べ物にも服にも困らない。これが私の日常で当たり前だと思っていましたが、全く当たり前ではないと気付きました。

今、平和な日本で私たちが過ごすことができているのはなぜでしょうか。それは戦争の恐ろしさを知っているからです。もう二度と戦争をしないと誓い、日本の再建に力をつくした人がいるからです。これは何十年たっても、何百年たっても、決して忘れてはいけない事実です。しかし、「あの日」から七十年以上がたち、この事実は忘れられつつあります。世界で唯一の被爆国である日本に住む私たちは、戦争という恐怖や、今の暮らしのありがたさを知るべきです。

では、もう二度とあの悲劇を繰り返さないために、平和な世界の実現のために、私たちに何ができるでしょう。私が考えて出した答えは「伝える」です。日本は核兵器の恐ろしさを知っている、たった一つの国です。だからこそ、世界へ「伝える」意味があるのではないでしょうか。

けれど、世界には七十億人を超える人がいて、子供一人が伝えたって何も変わらない、そう思った人はいませんか。そんなことはありません。誰か一人の考えが周りの人の意

識を変え、さらにその周りの人へ広まっていく。そうやって平和の輪が広まっていけば、きっと素晴らしい未来が待っているはずです。

今も世界各地で戦争が起こっています。私はそんな地域の人々に声を大にして伝えたいです。戦争の恐怖、平和の尊さ、大切な人を亡くす悲しみ、日常のありがたさを。

最後に、平和な世界を創っていくために、自分に何ができるか、よく考えてみて下さい。今日からあなたも「伝える」を始めてみませんか？

第３５回平和図書読書感想文コンクール
佳作

沖縄戦と原爆から考える平和について

釧路市立鳥取中学校　２年　伊藤（いとう）　来流（らいる）

僕が「平和」について考えたのは、沖縄戦で亡くなった人を追悼する平和祈念公園に行った事がきっかけです。まず、沖縄戦とは、太平洋戦争中、日本で唯一地上戦が行われた戦いです。沖縄戦といっても、全国から兵士が集められて、戦っていたそうです。実際に僕の曾祖母の兄が釧路から沖縄戦に参加し戦死したことを最近知りとても驚きました。それは、遺骨もなにも残らないほどの激しい戦争で、曾祖母は平和祈念公園に行きたかったと言っていたそうです。それで、僕の両親が実際に沖縄を訪れ名前の刻名されている礎をビデオに収め曾祖母に見せてあげたそうです。その後も何度か両親と一緒に僕も平和祈念公園を訪れています。現在の大自然豊かな青い海からは想像できませんが戦争で多くの自然とともに、僕の親戚も含め多くの大切な命が消えてしまったと思うと、とても心が痛み、二度とこのような戦争を起こしてはならないと思いました。

また、曾祖父と曾祖父の弟も戦争に行っていて曾祖父は戦争で頭、太もも、すねの三ヶ所を撃たれ、すねに動物の骨を入れていたそうです。曾祖父の弟は、「人間魚雷」の出撃予定だった日に不備があり中止になって助かったと聞きました。当時では「国民が自国を守るために死ぬのは美しい事」という教育がされていたそうで生き残る事は喜ばしい事ではなかったと思いますが、僕は時代や教育によって人の命に対する考えがこうも大きく変化するのかと改めて驚きました。

僕が読んだ「原爆詩集」は、一九四五年八月六日に広島、九日に長崎に投下された原子爆弾によって、命を奪われた人、また現在に至るまで死の恐怖と苦痛がつづられています。この詩集を読んで、原爆は多くの人の命だけでなく、多くの人のささやかな日常のくらしも奪ったんだと思いました。この本の「人間をかえせ」という詩の、「わたしをかえせ」という言葉は、原爆が投下されて、あまりにも変わってしまった、自分の生活をもとに戻せと訴えているのでしょう。もし、曾祖父と曾祖母のどちらかでも戦争で亡くなっていれば、自分もこの世にいなかったかもしれないのだと思うと、戦争は当時の人の命や暮らしだけでなく、その後の世代にまで影響を及ぼすものなのです。戦争は、本当に怖いと感じました。僕は、同じ詩の「へいわをかえせ」という一文を読んで「平和」について考えてみました。平和の反対は戦争なのでしょうか。戦争のない状態が必ずしも平和とは限りません。それは戦争がなくなったとしても、人としての最低の権利をもっているか、不平等がないか、社会的暴力がないか、これらすべてを考えた上で平

和な状態かどうかを判断できると思います。

最後に僕には夢があります。それは英語の勉強を頑張り海外で生活をしてみることです。海外で生活してみたい理由は、両親がアメリカで生活していた事があり、日本だけではなく、色々な国の人と知り合い文化やマナーを学ぶのも良い事だよと言っていたからです。そのためにはまず身近でできることから始めてみようと思います。一つ目は、生き物や人に優しくする。二つ目は、日頃口にする言葉遣いに気を付ける。三つ目は、自分の行動を振り返ってみる。四つ目は、クラスにいる友達、家族そしてこれから出会う人たちに優しい気持ちで接する…という事です。これから先の未来、世界の人々と一緒に助けあいいつも笑顔で安心して生活できるそんな世界をつくって本当の意味の「平和」と言える日が来る事を願っています。

第３５回平和図書読書感想文コンクール
佳作

戦争から学んだこと

北海道教育大学附属釧路義務教育学校　９年　松枝（まつえだ）　愛佳（あいか）

朝起きたらいつもと同じような一日が始まる。怯えることなく安心した生活が送れる。この本を読んで、そんな日常が当たり前にあることは、とても貴重で幸せなことだと深く考えさせられた。

私が今回読んだのは「朝の別れを　ヒロシマ、母と子の物語」だ。今まで原爆について深く知る機会があまりなかったので、実話をもとにしたこの本を選んだ。

十五歳のミチと母のマサノは爆心地から一．五キロ以内のところで被爆した。ミチの顔から首にかけて、「悪魔の爪」と呼ばれるケロイドができてしまった。マサノが働いてどんな薬を買って来ても治ることはなく、ミチは人目を避けて家に引きこもってしまう。そんなミチ達は、アメリカの医師達に助けられた。戦後十年、ミチが二十五歳のことだった。二十四人もの仲間と共にアメリカで植皮手術を受け、被爆前のように友達と遊びに行けるようになった。だんだん、失っていた自信を取り戻していった。

私がこの本を読んで一番心に残ったのは、ミチが生き残ったにも関わらず死にたいと何度も思ったことだ。私は十四年間生きてきて「死にたい」と思ったことは一度もない。まして、せっかくたくさんの人が一生懸命看病してつないでくれた命なのに死にたいと思うなんて、私は考えられない。でも、彼女はあの一九四五年の八月六日をヒロシマで過ごしていた。生き残ったことが心身ともに負担になったことが沢山あったのだろう。自分の体に治しようのない傷がついたこと、家族や友達を一瞬で奪われたこと、やり場のない哀しさが毎日募っていくこと…。生きる希望を見出せなくて、早く兄弟や友達のところへ行きたいと思ったこともあるだろう。

私は学校に行って友達と勉強したり遊んだり、家族と何気ない会話をしたり、毎日が充実していて楽しい。生きていて嬉しいし幸せ。彼女にもそんな気持ちやそんな生活があったはずなのに、奪ったのは誰だろう。それは戦争だ。戦争のせいで、家族も友達も楽しかった日常も、本当の自分でさえ失った。戦争はいけないこと、日本は二度と戦争をしないと言っている。本当にそれに尽きる。もしも戦争が一つも起こらない世界だったなら、どんなに多くの人が夢を叶えられただろうか。しかし、戦争ゼロの世界を創ることは、そう簡単にはいかない。今日、この瞬間も、世界では紛争が絶えない国で苦しんでいる人が沢山いる。二十五万人以上もの十八歳以下の子供が、兵士として武装戦争に参加しているそうだ。私が学校に行っている間、彼らは無理矢理戦わされて生涯残る

心と体の傷を負っている。

本の中で「憎むべきは戦争であって、人間ではない。」とミチが言っていた。初めはその考えを理解できなかった。大切な人を殺されても、相手を憎むべきではないという話があるだろうか。まして、彼女は実際に家族を失っているのに、それでもアメリカ人を憎まなかったのだろうか。しかし、何度も読み返す中で、私はこの言葉に共感できるようになった。実際は、戦争なんてしたくないし、早く終わって欲しいと思っていた人の方が多くいたのではないか。戦わないと、自分や自分の家族が殺されてしまうから、戦わざるを得なかったのではないか。私は、戦争に関する本で、戦争に賛成だという意見のものは見たことがない。もしかしたらあるのかもしれないが、圧倒的に反対派が多いだろう。何よりも、懸命に看病してくれた母やアメリカの医師、アメリカでパーティーに招待してくれた友達の優しさが彼女の考えを変えた。帰国後、彼女は実際に「人間の愛の大きさを身体を通して学んだような気がする」と語っている。戦争は国同士が支配したいとかお金が欲しいとか、大きな欲をぶつけ合わずに、お互いの国を思いやることで防ぐことができると思う。

今回この本を読んで、戦争の本当の恐ろしさを知り、改めて戦争は絶対にしてはいけないと感じることができた。生きることが幸せだと必ずしも言えるとは限らないし、思いやりがあれば幸せとも限らない。だから、私が幸せに生きていられるのは、家族・友達・先生・直接関わってはいないたくさんの人達の思いやりと、平和な環境のお陰だということを忘れてはいけないと思った。私が大人になったら、特定の人だけでなく、たくさんの人の幸せに関われるような仕事をしたい。まずは、毎日の小さなことに感謝して、どんなことにも思いやりの気持ちを持って生きていこうと思う。

第３５回平和図書読書感想文コンクール
佳作

平和のバトン

北海道教育大学附属釧路義務教育学校　９年　山本（やまもと）　明日香（あすか）

小学校の道徳の授業で生きていることは幸せだと教わった。しかしこの『夕凪の街桜の国』という本を読んで生きていることが苦しいという人がいたと知り、なぜそんな思いをして平和を手に入れなければいけなかったのかと感じた。

この本は３つの物語に分かれている。その中の一つの話を取り上げたいと思う。終戦十年後の広島で母と二人で暮らしている皆実は原爆を落とした側から死ぬように望まれた自分が生き延びていることに複雑な感情を抱いて過ごしていた。その思いは町に住んでいる人みんなが感じているのにも関わらずだれもあの日の話をしないことに違和感を覚えていた。そんなある日、自分と一緒に生きてくれる人物に出会うが、その直後に原爆病とみられる体調不良により亡くなってしまう。

この物語を読んで心に残ったシーンがある。それは皆実が原爆を落とした側に問いかける部分だ。＜『やった！またひとり殺せた』とちゃんと思うてくれとる？＞皆実は自分のことを生き延びてしまった側だと思っていたが、それは違ったということに気づいたとき当時はやむを得ないことだとしても、仕方ないと原爆を許せることなのかと疑問が浮かんだ。落として爆発して終わりではなく精神的に追い込んだり、残された家族のことも追い込んでしまう。恐ろしいもので目を背けてしまいたくなるものだからこそ正しく原爆のことを知りたいと思った。平和のために家族や大事な人を亡くし、これでよかったかもしれないと死んでしまったことを納得するというのはいくら平和のためとはいえ、代償が大きすぎるように思える。また、生き残った家族は自分がどうやって生きていくべきかずっと悩み続けるだろう。しかし、それは亡くなってしまった人を想うことに繋がり、次の世代にどうしようもできなかった感情を伝えるチャンスのように思う。

この本を読み終わって、もしも私が皆実だったらと考えてみた。何度も考えてみたが、やっぱり皆実と同じように自分が生き延びてしまっていることに罪悪感を持ちながら暮らしていくと思う。唯一違うところといえば、皆実は死ぬ間際に原爆を落とした側のことを考えていたが、私は残してしまった母のことを考えると思った。自分も感じたあの複雑な気持ちを背負いながら生きていくことになる母に申し訳ないと思いながら眠りについていくだろうと感じた。

つまりは、生きていても亡くなってからも家族に対する罪悪感は変わらないというこ

とだ。死んでしまえば、気持ちはなくなるとはいえ安らかに眠ることはできないように思う。

やはり、このような時代よりも現代の方が格段に生きやすいだろう。しかし、あの時代があったからこそ、あの時代で亡くなられた方々がいるからこそ私達が平和に幸せに暮らしていけるのだ。また、コロナ社会を生きている私達なら当たり前なことを当たり前にできるこのありがたみは痛いほど分かるはずだ。だから、明日があるなどと時間に甘えず今しかないこの瞬間を大事に生きていきたい。令和の先を生きていく人々、もっと先の未来を生きていく人々へ平和のバトンを繋げていき、今よりも平和で幸せな未来を私達の手で作っていきたい。いや、作っていくのだ。ひょっとすると、どうやって平和な未来を作っていくのかというのは原爆から受けとった永遠の宿題なのかもしれない。

第３５回平和図書読書感想文コンクール
佳作

戦争を知らない自分に

釧路市立阿寒湖義務教育学校　８年　山崎（やまざき）　碧音（あのん）

私は、戦争に関心がなかったと言えるかもしれない。平和な今に慣れすぎていて。

私は、この度「まっ黒なおべんとう」という本を読みました。この物語は、簡潔に言うのならば第二次世界大戦の真っ只中、ある幸せだった家族に降りかかった一つの不幸のお話です。プロローグの数行で「広島」とか「原爆」とか「まっ黒いおべんとう」とかそんな単語が並んでいる時点でなんとなく察したような気がして、実際他人だけど他人事のように「可哀想」と思いました。思っただけだったのです。

実際、今を生きる人たちの中に戦争の頃の記憶を鮮明に覚えている方は少ないと思います。だから、いくら再現のものを見ようとも当時を生きていた人のようにまで戦争の恐ろしさがわかりません。自分自身、特に再現の物も見ていませんでした。強いて言うなら社会の勉強の時だけです。

ですが私は、この本を読んでみて少し戦争を知ったと思いましたし、二つほど心に残った場面もありました。

一つ目は、「お金があっても買えるものがない」というところです。今、お金はいくらあっても困らない世の中はそれだけ多くお金を使える機会があるという事。戦争の時のような色々なところに被害が出て食べる物も着るものも作る事すらできない中、お金を片手に握っていたって意味がないんだなと気付いてはっ、としました。

二つ目は、息子を失ったお母さんの台詞「ちがう、ちがう、しげるのじゃない」です。最初に述べたある幸せだった家族の息子。滋とそのお母さんの事です。一九四五年の八月六日、見たことのない雲と衝撃が走った。いつものごとく学校に行った滋はいつになっても帰ってこない。心配なお母さんは次の日、荒れた広島を隅から隅へと見て愛する息子を探しました。そんな時、ふとある頭蓋骨に目がぴたりと止まり何かが映し出されました。滋でした。それに加えてその頭蓋骨の隣には滋が兄の利昭から貰った、「折免利昭」とほってあったお弁当がありました。まっ黒いおべんとうがありました。お母さんはそんな目の前の光景に耐えきれず膝をつき涙を流しながら言いました。

勿論、物語に出てくる人たちは顔も見たことない言うなれば赤の他人です。ですが、私はこのシーンで泣きました。この一言にお母さんの苦しさや戦争に対する怒りなどが含まれているように聞こえたからです。

この本を読んだきっかけは、ただ宿題だったから。そんな理由と言ってもいいのかす

らわからない理由で読んだのに、泣くほど感情移入をしました。きっかけなんて何でも良かったんです。私は以上の事から、ちょっと前の自分自身よりも、戦争について深く考えることができるようになったと思いました。

第２１回平和の主張コンクール
最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

戦争のない世界へ

北海道釧路北陽高等学校　２年　高橋（たかはし）　和花（のどか）

私は戦争反対です。理由がいくつかあるので書きたいと思います。

一つ目の理由は、多くの犠牲者が出るからです。今、爆弾が落ちてきたとします。そうすると、生まれたばかりの命も、必死で今を生きている人も、目標をかかげて生きている人も一瞬で亡くなります。実際、第二次世界大戦では、日本で三一〇万人もの人々が亡くなっています。

二つ目の理由は、戦争は終戦してもそれだけでは終わらないからです。アメリカではこのようなことが起こっています。二〇〇一年に始まったアフガニスタンでの戦争と、二〇〇三年から始まったイラク戦争から、本国に戻った米兵たちを復帰軍人といいます。多くの兵士たちは戦地で想像を絶するような試練を経験して帰国します。その中で「心的外傷後ストレス障害」を患う帰還兵も多いそうです。そういった障害を患い、自殺に追いこまれてしまうという人がいます。二〇一四年に発表によると、一日に二十二人が自殺しているそうです。単純に計算すると、一年に約八千人が自殺しているということになります。

ここで、ある一人の軍人の方の話を紹介します。ワシントン州に住んでいた、デリック・カークランドさんは高校卒業後米陸軍に入隊した。訓練を受けた後、イラクに派兵された。ある日、彼の所属する小隊が、テロリストのせん滅を目的とした作戦をイラクの小村で行うことになった。彼は、他の兵士たちと、ある民家のドアを打ち破り侵入した。侵入後、イラク人男性を撃った。男性は床には倒れたが、すぐに死亡したわけではなかった。小隊長がカークランドさんに「そいつの胸を踏みつけろ。そうすれば出血が加速して早く絶命する。」と命令した。カークランドさんは反論したものの、命令に従わざるをえなかった。この時の光景が彼の脳裏から消えることはなかった。その後、米国への帰還を許されたが再びイラク行きを命じられる。彼は戦場で精神を病み、再び米国に戻って陸軍病院にしばらく入院した。その時医師が「自殺する危険性は低いので、小隊に戻るべき」と判断を下し、三度目のイラク行きとなった。小隊に戻ると、小隊長が叱責した。カークランドさんはイラクで何度か自殺未遂事件を起こしたが、それでも任期を終えて、ワシントン州の自宅に戻った。だが精神状態は決して良いわけではなかった。母親に「僕は人殺しだ」とつぶやき、ふさぎこむ日が多くなった。精神科医のところに通ったが、最後は自宅の押し入れで首を吊った。二一歳だった。

この軍人の方のように、帰還しても精神を病み、自殺してしまう人がいます。戦争の影響はずっと続くのだと思います。終戦してもそれだけでは終わらないというのが戦争です。

私が戦争について調べている中で、一つ考えさせられたことがありました。「もしも今どこかからミサイルがとんできて、自分の大切な人が無残に殺されてしまっても、戦争反対ということを言えるか？」ということです。戦争は起きないことが大切だと思っています。ですが、もし自分の大切な人が殺されてしまったら…。と考えると、「戦争反対！反撃なんてしてはいけない！」と言える自信がありません。もしかしたら、「反撃して、ミサイルを撃ってきた国にも同じ思いをさせてほしい」などと思ってしまうかもしれません。

現在、ウクライナでたくさんの人々が戦争によって亡くなっています。一日でも早く終わってほしいです。私は戦争は何があっても起きてはいけないと思います。

第２１回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）

平和について

北海道釧路北陽高等学校　２年　定岡（さだおか）　若奈（わかな）

私は、平和というものが何なのか、どんな状態のものなのかということに二つの考えがあります。一つ目の考えは、争いがなくお互いを意図的に傷つけ合わないこと、です。二つ目は、小さなことでも幸せだと感じられること、です。なぜこう思うか理由を説明していきます。

まず、一つ目の争いがなくお互いを意図的に傷つけ合わないことという考えの理由は、簡潔に言うと、戦争は絶対にあってはならないということです。人間は昔、たくさんの戦争を起こしてきました。もちろん現在も起こっています。資源の奪い合い、民族・宗教の対立、領土の奪い合いなどさまざまな理由があります。これらの問題は戦争でお互いを傷つけ合い、殺し合うことで解決できたのでしょうか。少なくても何か解決できたことはあったかもしれません。ですが、それを確実に越える損害や人々の苦しみの方が大きかったと思います。戦争は、目的だった何かを得ることはできたかもしれませんが、たくさんの人間の命、大切な人を失った苦しみ、未来、時間、家族、一生残ってしまう後遺症、失ってしまったものが得たものより多かったと思います。結果戦争というものは、戦争中も戦争後も良かったと思えることはなかったと思います。兵力で衝突し合いたくさんの犠牲を生み出してしまいました。問題を解決する方法は、兵力の衝突以外にもあったのではないかと思います。もちろんそんな簡単にできることではないと思っています。ですが、時間をかけてでも兵力の衝突はさけてお互いを傷つけ合わない方法で何事も取り組んでいくべきだと思います。

次に二つ目の小さなことでも幸せだと感じられることという考えの理由は、幸せイコール平和だと思うからです。平和であれば幸せで、幸せであれば平和だと思います。大きな幸せを数年に一度ということではなく、小さな幸せを毎日少しずつ感じられたら、一日のうちほんの少しでも幸せで平和を感じられます。これも簡単なことではないと思います。貧しかったり、辛かったり、気分が沈んでいたり、幸せを感じられないこともあると思います。無理に幸せを感じる必要はないと思いますが、少しずつの積み重ねで未来は大きく変わってくると思います。

最後にまとめです。私が考える平和は、争いがなくお互いを意図的に傷つけ合わないこと、小さなことでも幸せだと感じられること、です。戦争だけのことではないですが、何か問題が起きたとき、嫌なことがあったとき兵力や暴力を使うのは、絶対に良くない

と思います。その行動によって、傷つく人が必ずいます。何事もどうすれば傷つく人が少なく物事を解決できるかしっかり考えるべきだと思います。平和というのは争い事だけではないです。今ある日常から平和は存在しています。自分が、大切な人が、世界が平和に暮らしていくために、私たち一人一人の考え、行動はとても大切なものだと思います。

第２１回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

平和とは何か

北海道釧路北陽高等学校　２年　髙山（たかやま）　佳音（かのん）

皆さんは、「平和」と聞いて連想する言葉は何ですか。私が思い浮かぶのは、「戦争」や「笑顔」、「幸せ」という言葉です。思い浮かぶ言葉は人それぞれだと思います。そこから私は、平和というのは様々な形があり、その人によって平和の考え方は違うのではないかと考えました。

なぜなら、それぞれの暮らしや生活があるからです。今、世界中で問題になっているウクライナとロシアの戦争を例として挙げると、被害者の方達は平和を望んでいることでしょう。そして、この平和というのは、いつも通りの生活に戻りたかったり、少しでも早くこの戦争を終わらせたい気持ちや、離れ離れになってしまった家族に会いたい思いなど色々な「願い」という平和の形なのではないかと思いました。他にも、貧困や災害、教育などの社会問題に苦しんでいる方達も同様に、様々な平和の形があると思います。そこで私は、そもそも平和とは何なのかが気になり、インターネットや辞書を使って調べてみました。すると、どれも「戦争がなく、世の中がおだやかな状態であること」だと書かれていました。改めて自分の生活を振り返ってみると、今の生活はとても充実していて、日本は争いがなく、社会問題で苦しんでいる国とは違い、世の中が穏やかな状態であると気付かされました。つまり、インターネットや辞書で書かれていた「平和」なのです。私はこの環境に感謝するべきだと思いました。戦争や東日本大震災などの災害で残された人は、今でも家族が見つかっていなかったりしていて、心を痛めている方達が沢山います。災害はどんなに対策をしても避けられないことがありますが、戦争は人が意図的にするものなので、私たち一般市民はできることが限られてきますが、なんとか戦争を止めることが出来たら良いなと思いました。

最後に、私はこの作文を通して、「平和」とは何か考えさせられ、とても良い経験になりました。実際に自分がその立場になってみないとわからない思いが沢山で、「平和とは何か？」という質問に答えは無いと思います。人それぞれが持つ平和の形や考え方があるからこそ争いが起きてしまうのではないかと思いました。正直、この作文を書く時に、どんなことを書けば良いのかわかりませんでした。戦争について書けば良いのか、それとも貧困や災害で苦しんでいる方達について書けば良いのか…自分の中でいくつか案が出ましたが、そもそもの平和の意味について調べてみると、辞書などで出てくる平和の意味と自分が思っていた平和の意味が違い、もしかしたら人それぞれの平和の捉え方も違うのではないかと思い、それをテーマにして作文を書きました。言葉にするのがとても難しかったですが、平和について考える機会はなかなか無いので、良いきっかけになりました。

第２１回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市連合町内会会長賞）

平和とは

北海道釧路北陽高等学校　２年　渡邉（わたなべ）　奏（かなで）

わたしは平和な世界も平和ではない世界も知りません。何が平和で何が平和ではないのか、答えはないと思っています。そこで、本当に平和であることに正解はないのか。そしてどういうときに平和ではなくなり、どうしたら平和になるのか、この作文を通して考えてみました。

まず平和とは何なのか考えてみました。「平和とは戦争がないこと」と言われがちですが、わたしは違うと考えました。戦争がない状態が必ず平和とは限らないと思います。それは、戦争がなくたって人として持つべき最低の権利を持っているか、不平等ではないか社会的暴力がないか、これらをすべて考えた上で平和な状態か判断できると思います。つまり、構造的暴力に侵されず、調和がとれて、そして、戦争がない状態があって初めて平和といえるということです。

平和ではなくなる状態についてわたしが考える、基本的人権、戦争、社会的暴力の三つについて自分の意見を書いていきたいと思います。

まず基本的人権についてです。基本的人権とは、世界人権宣言で初めて公式に認められたものです。「あらゆる人と国が達成しなければならない共通の基準」として採択されました。世界上のすべての人には、差別なく平等に生きる権利があると世界人権宣言で述べられているのにも関わらず、貧困状態にある人々の多くは差別や不平等にさらされており人権が守られていない状態にあります。例えばイラクでは、ユニセフに子どもの四人に一人は紛争と貧困の影響を受けていると発表されました。子どもはもっとも弱い立場です。二〇十七年の報告では、紛争の影響で深刻な暴力を受けている子どもが四〇〇万人以上存在し、年間で二七〇人の子どもが殺害されました。

次に戦争です。わたしは戦争を経験したことがないので戦争中の人々の暮らしについて調べてみました。戦争が長くなるにつれ、人々の生活はだんだん苦しくなっていきました。食料や衣服、燃料など生活に欠かせない物も自由に手に入れることができなくなり、みんな政府から配られるキップを持って配給を受けるようになりました。そして、有名な「ほしがりません勝つまでは」や「ぜいたくは敵だ」といったスローガンで自分たちをはげましながら不自由な生活にたえていました。

最後に社会的暴力についてです。これは社会的に不公平があり、その人の潜在的人格を発揮できないまま生涯を終えてしまうことがあれば、そこには暴力があったといえる

でしょう。その暴力とは、個人的な暴力とはもちろん違い、主語がわからない、見えないものです。

平和について深く考えてみてわかったことがあります。それは、今の自分が生活している環境は平和であり、平和でない環境は割と近くにあり、いつなってもおかしくないということです。平和である今という時を大事に生きていこうと思いました。

第２１回平和の主張コンクール
佳作

平和

北海道釧路北陽高等学校　２年　伊藤（いとう）　沙彩（さあや）

二〇二二年、二月二十四日、ロシアがウクライナを侵攻したことが分かりました。最近ではこの事について毎日のようにニュースや新聞で見かけます。ロシアがウクライナを侵攻する理由は大きく二つあると考えられています。

一つ目は人口が多いウクライナをどうしても抑えたいからです。ウクライナは元々、ソ連・ロシア側の国であり、現在もＮＡＴＯ（北大西洋条約機構）に入っていません。さらに、旧ソ連の中でウクライナは二番目に人口が多い国であったので絶対にロシアはＮＡＴＯに加入させたくないんです。どうしても、ウクライナを侵攻してでも手中に収めたく、アメリカ側に渡したくないわけです。

二つ目はプーチンによる民主化運動の鎮静のためです。ロシアは独裁政権で有名です。ロシアの大統領であるプーチンはウクライナを取り込んで独立国家を継続させたいと考えます。

このロシアのウクライナ侵攻には多くの人が衝撃を受けました。なぜ、この二十一世紀に侵略戦争をする必要があるのか。数世紀ものあいだ、国際平和を実現するために、数多くの人が真剣な努力を傾けてきました。しかし、その真摯な努力にもかかわらず、いまだに平和が訪れていません。戦争のことは、学校の授業で習ったことやテレビで少し見たりしたことぐらいで詳しくは分かりません。ですが、国と国の争いに武力を使って人を殺しあったり、他人を巻き込んだりしてとても怖いことなんだということは分かります。今回取り上げているロシアのウクライナ侵攻で、ウクライナの街はミサイルで壊されて、一般市民の犠牲者もでています。犠牲者には子どももいます。武力を使うとこういうことが起こってしまうので本当に良くないと思います。第二次世界大戦以来の大きな戦争になるかもしれず、世界の自由と平和の危機であると心配しています。

今すぐに世界平和を考え実行するのはとても難しいです。ですが、今、私が住んでいる日本の平和は世界平和よりも考えやすいと思います。まず、日本には「戦争をしない」と決めた憲法があります。ロシアと日本は近くてもうそろそろ日本にきてもおかしくありません。ですが、日本には戦争をしないという憲法があるので完全にしないとは言えませんが日本は戦争しないと思います。私は、このような法律が、世界中に広がれば、世界が平和になると思います。だから、日本はまず、この憲法を守り、世界に広げる努力をするといいと思っています。

第２１回平和の主張コンクール
佳作

戦争のない世界に

北海道釧路北陽高等学校　２年　佐久間（さくま）　慧（けい）

なぜ戦争、争いは起こってしまうんでしょうか。きっと世界中の人々が平和や平穏を願っているはずです。

僕が戦争というものを初めて知ったのは、小学生の頃でした。中でも心に残っていることは、特攻についてのテレビ特集です。特攻は、爆弾を積んだ飛行機や魚雷に人間が乗り込んで、軍艦に体当たりをするという攻撃方法です。もちろん乗り込んだ人間が帰ることはありません。そのテレビ特集では、特攻に行く前のボイスメッセージが放送されました。今の僕より少し年上の若い男性が
「国のために戦って死ぬことは誇るべきことで本望だ。後悔はない。」と言っていたことを覚えています。狂気じみていると感じました。それと同時に過去の日本での命の軽さを思い知りました。

第二次世界大戦による死者の数は世界で約五千万人から八千万人だそうです。日本に投下された二つの原子爆弾は、合計で約五十万人の命を奪っています。原子爆弾の恐ろしさはこの事実が物語っています。

現在、世界には一万三千八十発もの原子爆弾があり、その威力は日本に投下されたものの三千倍を超えるものもあるそうです。その爆発は二千メートル先からも確認され、高度四十キロメートル（エベレスト山の約四．五倍の高さ）までキノコ雲を発生させたといいます。その恐ろしさは想像することも難しいですが、もし戦争が起きて、その爆弾が使用されたなら、第二次世界大戦を上回る死者を生むことになるかもしれません。

ですが、戦争を望む人なんてきっといません。平和を望んで生きている人がほとんどのはずです。それでも国家間で問題は起こってしまうことは止められません。その時に武力を行使しないことが大切で、平和的解決を諦めず、折衷案を探し続けることは平和を追い求めていくことにつながっていくのだと思います。

第二次世界大戦という多くの死者を出した戦争より後の時代に生まれた僕たちは、歴史から戦争の悲惨さや残酷さを学ぶことができ、また、平和の重要性を知ることができると思います。

命すら軽くなってしまう戦争がいつまでも忘れられないように事実を伝え続けていってほしいと思います。

これからの時代が、戦争の時代にならないように、一人ひとりが過去の戦争のことを知り、国家間の問題も、戦争のような武力行使の方法ではなく、話し合いなどによって、争いの火種を残すことなく、平和的解決へ導かれていけばいいなと思います。

第２１回平和の主張コンクール
佳作

私が思う平和について

北海道釧路北陽高等学校　２年　宮木（みやき）　美羽（みう）

私は、平和とは思いやりの心を持つことだと考えました。

思いやりの心を持てばみんなが笑顔で過ごすことが出来、戦争などで罪のない人々も殺すこともされず、安心して暮らせて日常生活を普通に暮らせるからです。思いやりの心を持つ以外に、貧困や飢饉が失くなれば平和だと思います。

貧困や飢饉がある原因は、長期間に渡り、十分に食べることが出来ず、栄養不足になり、生存と社会的な生活が困難になっている状態であり、国連食糧農業機関のＦＡＯは、栄養不足状態を「十分な食料、即ち、健康的で活動的な生活を送る為に十分な食物エネルギー量を継続的に入手する事が出来ないこと」としているらしいですが、何故栄養不足になってしまうのか、どうしたら栄養不足問題や貧困である状況を改善出来るのかを考えてみました。無収入、又は十分な収入が得られない場合は、自分の食糧を確保し、生産することが出来ないので、極度の貧困に陥ると、農民は作物の生産能力が落ち込んでしまいます。収入源が得られない事だけではなく、地震、津波、洪水、干ばつなどの自然災害も飢饉や飢餓の原因になると思います。

農作物や田畑が被害を受け、家や仕事などの生活基盤も失われてしまうからです。世界の中で食糧不足に苦しむ八割以上の人々は、自然災害が発生しやすい場所で生活していることが分かっています。

ユニセフやSDGsがこれらの貧困や飢饉をなくす為に、動いているのですが活動内容としては、保健や水と衛生、栄養、災害や紛争が起きた地域への支援などを行っており、学校でも配布された事もあるから知っている人も多いと思いますが、ユニセフの募金袋に記載されている文章を読むと、例えば百円で出来ること。と書いてある欄に、一錠で四～五Ｌの水をきれいにすることが出来る薬があります。たったの百円で四Ｌから五Ｌの水がきれいになるのなら、募金袋にお金を入れて少しでも貧困や飢餓、紛争などで困っている人を救う為にも募金しよう。という気になります。

私は、自分に何が出来るのだろうと沢山考えた結果、調べる事や考える事。そして行動するという事に行きつきました。まず、いつも手にしているスマートフォンで様子を調べる、資料をとりよせる、日本ユニセフ協会ページを読んでみる事。どうして困っているのかを考えていく事。分かった事を周りの人たちに伝える、募金活動をするという事などが私に出来る事だと思います。

普段、何気なく過ごしていますが世界にはまだ小さいのに働かなければいけない子どもや、紛争に巻き込まれてしまう人、栄養が不足している人、きれいな水が十分に使えない人々がいるという事についてとても考えさせられました。やはり、幸せになる為に生

まれてきているので、困っている人がいたら手と手をとりあって思いやりの心を互いに持ちあい共存共栄していく世界を目指していくと今よりももっと平和に近づけると感じました。

第２１回平和の主張コンクール
佳作

平和な世界へ

北海道釧路北陽高等学校　２年　前田（まえだ）　あすか

私にとって平和とは生きている中で一番かけてはならないものだと思います。そしてこの世に生まれてきた私達はその平和な生活をおくれる権利があると思います。

しかし、その権利さえも奪われている人達がいるという事実があります。中学生の時、社会の授業で戦争について学びました。たくさんの命が人間の手によって失われました。同じ人間なのに人間を苦しめるためだけに作られた核兵器や原子爆弾。今でも後遺症によって苦しんでいる人は少なくありません。現在でも戦争や核開発などにより多くの命が失われています。たとえどんな問題や理由があろうと争いや戦争で解決しては絶対にいけないと思います。戦争は世界の問題です。一人の力だけで解決しようとしても小さすぎるけれども、国民の一人一人がこの問題に取り組んでいったらどうでしょうか？「戦争はしてはいけない」という気持ちがたくさん集まれば少しでも変わっていくことはあると思います。今もどこかの国で苦しんでいる人がいて戦争をなくしたいと願う誰かがいることを忘れてはいけません。

もし今日本が戦争中だったらと考えるととてもつらいです。毎日当たり前のように出されているご飯も食べられない。学校でもちゃんとした教育を受けることができない。大切な人達、例えば家族や友人などがいつ死んでしまうかわからない。考えただけでとても悲しくてつらいです。戦争は人間を苦しめるだけなのです。戦争をして得るものは何１つなく失っていくだけだと思います。いつも平和な世界であれば支えあって生きていけると思うのです。私が思う平和とは世界の人々同士で差別せずどの国も仲良しでみんな幸せにくらせる社会が私の平和です。戦争をしていた頃いつも空にはひこうきが飛んでいてみんなそれにおびえながらすごしていたそうです。

今の時代は昔と同じように戦争をしている所もありますがやっぱり世界国々お互いがお互いを信頼し合って助けあっていかなければならないと思います。貧しい国々や人々がたくさんいるのですからその人たちを助けていく優しさが必要だと思います。私が大人になったときにその貧しい国々が平和になっていればいいなととても思います。

戦争は二度とやってはいけません。人間が苦しむだけなんて地獄みたいだと思います。まずはみんな手をとりあって協力し合って何をするべきなのか他にもっと大事なことに目を向けて考えていくべきだと思います。普通に暮らせることが私たちすべての人間の幸せなのでその幸せに恵まれなかった子供たちに未来を作っていかなればならないのです。

第２１回平和の主張コンクール
佳作

平和って何だろう

北海道釧路北陽高等学校　２年　那佐（なさ）　晏（はる）

平和って何だと思いますか？戦争がなく暮らせていること、コロナウイルスが無くなること、いつも通り学校に行って友達とおしゃべりしてるときなど、考えていくとたくさんあると思います。でも皆が思っている平和というものは人それぞれ違うと思うし、定義なんて無いと思います。そして、今は世界的に見て、少し平和とはかけ離れているのではないでしょうか。いつまでたっても収束の見えない新型コロナウイルス、ロシアによるウクライナ侵攻などでニュースは持ち切りです。もちろん悪いニュースばかりではありませんが、地球に住んでいる各国の人々達が、

「世界は平和だ。」

と声を揃えていえる日は現状では難しいし、今後そのような日が訪れるのかも分かりません。平和はいつ訪れてくるのか分かりませんが、反対に、平和がいつ崩れていくのかも分かりません。

先ほどの例で出したように、新型コロナウイルスがいつどのようにして拡大し、人々を苦しめることが予想できたのでしょうか。ロシアのウクライナ侵攻によって、どれだけのたくさんの人が命を落とし、どれだけの人が悲しんだのか、事前に知っていた人はいなかったのではないかと思います。実際に僕も、新型コロナウイルスによる影響で、大会の中止や、学校閉鎖などそのような被害を経験しました。当たり前だったことが突然終わってしまうのはとても辛いことだし、その瞬間は突如やってきます。平和が崩れていくことは分かっていたとしても止めることができません。未然に防ぐことができないのなら、その中でどう生きていくことができるのかが大切になってくるのだと思います。険しい状況下の中で、自分のできることは何なのだろうか。と考えると、どんなことも全力で取り組む、やり遂げるということが最善だと考えました。

僕は小学生の頃、おばあちゃんを亡くしました。おばあちゃんは入院していて、次にお見舞いに行くと予定していた日には、もう会うことはできませんでした。この出来事をとても後悔していて、今こうして過ごしている瞬間にも何かが変わり続けているんだと実感しました。時間はみんな平等ですが、待ってはくれないし、同じ場面は二度と繰り返すことはできません。よく、やらない後悔よりもやる後悔をしたほうが後に残らずに過ごせると聞きますが、本当にそういうことなんだ、と身を持って実感しました。

平和についてたくさんの考えを書いてきましたが、先ほどにもあったように、この先何が起こるか分からないし、いつ当たり前が終わってしまうのかもわかりません。そんなことがいつ起こってもいいように、何事も後悔しないよう全力で取り組んでいくことが、平和につながっていくのだと思いました。

第２１回平和の主張コンクール
佳作

平和の意味

北海道釧路北陽高等学校　２年　齋藤（さいとう）　翔太（しょうた）

今の現状は平和と言えるでしょうか。そもそも平和とは何かという疑問を持ちました。

まずは、平和とは何か、それは、

「戦争や暴力で社会が乱れること。」これは、今のロシアやウクライナの問題もあり、平和ではないと考えました。でも、ロシアが攻撃しなければ平和だと思ってる人もいるかもしれませんが、僕はそうは思いません。

「暴力」ということで、日本国内でも多発しているため、平和とはいえないと思いました。テレビに出ている事件以外にも出ていない事件のほうが多いように感じるので、

「平和」という言葉には合わないと感じました。

しかし、平和なこともよくあります。それは、

「普通の日常を普通に送ること。」平和の中でもこれが一番平和だと思いました。いつものことをなにもないで普通に暮らすことが望ましいですが、それは、なかなか難しいです。家族の中での喧嘩もある意味、

「戦争」だと思います。意見が食い違い、口の戦争になっているからです。口喧嘩は、他人の言動が気に入らず指摘して起こることなので、それに反発することによって、戦争が起こると思います。ロシアとウクライナの問題では、ウクライナがワルシャワ条約機構から北大西洋条約機構に移動したいという言動がロシア側にとっては気に入らなかったため、それがロシア側の侵攻する原因になったと考えられます。ウクライナ側は、北大西洋条約機構の国々から支援を受けていますが、支援を受けている人たちも平和ではありません。支援をしている国にいたとしても、攻撃されているのには変わりないからです。

ウクライナは平和ではないということだが、日本はどうだろうか。平和ではないです。ロシアがこうした戦争をしているなかで、北方領土問題があるため、ロシアはいつ攻撃してくるか分からない状態にあります。それ以外にも竹島や尖閣諸島などの問題があるため、こうしたことが戦争に発展していく恐れがあります。

こうして考えると、些細な事でも戦争と捉えることができ、それが発展していく恐れがあります。つまり、戦争は双方の価値観が違うことによって起こります。なので、戦争を起こさないで平和を維持するためには、相手の価値観を理解する必要があると考えました。しかし、相手の価値観を理解するということが難しいこともあります。そうしたことは、解決に向かって努力をしていくことも大事です。戦争の反対は平和だけでなく、

「相手の価値観を理解する。」そして、

「解決」だと思いました。

第２１回平和の主張コンクール
佳作

平和について

北海道釧路北陽高等学校　２年　平野（ひらの）　心結（みゆう）

平和とは何かと質問をされた時、たくさんの考えがあると思いますが、わたしは「みんなが安心して笑顔で暮らしていること」だと思います。その理由は三つあります。

まず一つ目は、「平和」というものは、個人ではなく、周りの人たちの全員が感じていなければいけないものだと思ったからです。例えば、クラスでいじめがあったとして、いじめている人は何とも思っていないので、「このクラスは平和だ」というかもしれません。ですが、いじめられている人は、「平和ではない」というと思います。この場合、平和だという人が多いからこのクラスは平和であるとなってしまうことがあるかもしれません。これが本当に平和といえるのでしょうか。わたしは、一人でも平和ではないと答えたら平和ではないと思いました。

二つ目の理由は、安心して暮らせることが一番大切だと思ったからです。先程述べた例えでも、いじめが存在している時点で安心することができません。

また、「安心」は心が安らぐと書きます。つまり、不安なことがなく落ち着いている状態です。安心するには、肉体的にも精神的にも自分自身が整っていることが重要です。そして、不安にならないためには平和になることが必要です。このことから、平和と安心はイコールの関係になると思いました。

三つ目の理由は、この状態が一番楽しく生きていきやすいと思ったからです。わたしは、周りの人もそうだけど、まずは自分が良い生き方をしたいと思っているので、自分が思っている平和な生き方をしたいと思いました。

ところで、平和とは何かという質問をすると、「戦争をしないこと」と答える人がいます。確かに戦争は何があっても絶対に繰り返してはいけないものだと思います。ですが、戦争が始まるのは、領土を奪いたいから、資源が欲しいからという理由なら、戦争が終わった後に国を豊かにしたいため。政治による内戦なら国を新しくしてより良い国家を目指すためであり、どれも戦争後にその国が平和になるために行っていることだということが分かります。そう考えると、わたしは戦争の全てが悪いとは考えられなくなりました。

ただし、日本には憲法で「平和主義」というものが定められており、戦争や武力による威嚇または武力の行使を永久に放棄するとあります。このことからも、戦争をすることは絶対にいけないことだと思いました。

これらのことから、わたしは、平和とは「みんなが安心して笑顔で暮らしていること」だと思いました。しかし、平和でいることはとても難しいです。なぜなら、身近なことからでも平和でなくなることがあるからです。だからこそ、一人一人が自分で考えてい

る平和を目指すことで、みんなが安心して笑顔でいられるようになると思いました。

第２１回平和の主張コンクール
佳作

私の思う平和

北海道釧路北陽高等学校　２年　飯澤（いいざわ）　夢来（ゆら）

私は、今、世界で起こっている紛争や戦争などに反対です。現在、日本国内では、戦争や争いごとがないため、それらに対する意識が薄まりつつありますが、世界では戦争などの争いごとが起こり続けています。

私が、これらの争いごとに反対する理由は、二つあります。まず、たくさんの命が犠牲になるということです。これからの未来がある子ども達などが被害をくらい、障がいを持ったまま、今後を生きていくことになってしまったり、未来も見れずに亡くなっていく子ども達も少なくはありません。そして、命だけでなく、地域などにも被害が及びます。その他にも、戦争などには莫大な費用がかかります。それらの費用の使い道は、他にもたくさんあると思います。例えば、難民や貧困などで苦しんでいる人々への資金の援助に回したり、それぞれの国を発展させることができると私は思います。資金の援助は、募金などで行うことができると私は考えています。また、国の発展については、質の高い教育をしていくことや適切な労働環境を確保することや、安全な水を増やしていくことができると思います。こういった動きを増やしていくことにより、ＩＣＴ企業が増えていったり、企業の海外進出を期待できたり、飢餓などによった人口減少を減らしていくことができると、私は思いました。

そして、私の思う平和は、戦争や紛争などの争いごとが起きないことです。上記で述べた通り、争いごとにはデメリットが多くあります。そのため、争いごとを失くす動きは平和につながると思いました。また、人種差別や貧富の差などで苦しんでいる人々がたくさんいます。そのような差別を減らせるように見た目などからの偏見をなくしていける取り組みを増やし、広めることが、平和につながると思いました。その他には、暴力や犯罪が減り、世界中の人々が毎日安全で、当たり前の暮らしができる環境があるということは、平和であり、私たちが理想とする世界に近づくことができると思います。今、日本で、争いごとがなく、このような生活を送れていることに、感謝をしていくことが大切です。やはり、世界中の人々が安心できる世界を作っていくことが、私の思う平和です。

このことから、私は世界で起きている戦争や紛争などの争いごとに反対します。